**様式 C-19**

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 18 日現在

機関番号：12701
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007 ～ 2010
課題番号：19520449
研究課題名（和文）ＰＡＣ分析法を活用した学習者が日本語教材から受ける影響と学習者要因の解明
研究課題名（英文） A study about the relation between the Japanese learners' factor and the influence of Japanese reading textbooks by using PAC-analysis

研究代表者 丸山 千歌（MARUYAMA CHIKA）
横浜国立大学・留学生センター・准教授
研究者番号：30323942

研究成果の概要（和文）：
本研究は、従来教材分析と授業観察に重点がおかれてきたこの研究分野に、学習者の視点を取り入れた点に特徴がある。具体的にはＰＡＣ分析法を研究手法として、オセアニアの日本語学習者を対象とした縦断的研究を行い、(1)予想以上にステレオタイプ的教材の与える影響は大きいこと、(2) ステレオタイプ的な教材の読み取りは、留学をすることだけでは変わらず、留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を伴った、主体的な読みを促す鍵になるという示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：
The originality of this study is to bring the viewpoint of the Japanese learner into the research that previously focused on the analysis of the textbook and observation of classes. This longitudinal research for the interaction between the reading text and Japanese learners from Oceania using PAC-analysis points out:(1) the influence of the stereotypical information toward the Japanese learner is greater than our expectation, (2) the Japanese learner is not able to read the stereotypical text only by the fact of study abroad, and the key of the change of the her/his reading of the text is the novelty and the deepness of her/his contact to the Japanese people and Japanese society during her/his stay in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合 計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 446, 815 | 134, 044 | 580, 859 |
| 2008 年度 | 1, 353, 185 | 405, 955 | 1, 759, 140 |
| 2009 年度 | 900, 000 | 270, 000 | 1, 170, 000 |
| 2010 年度 | 700, 000 | 210, 000 | 910, 000 |
| 年度 | | | |
| 総 計 | 3, 400, 000 | 1, 019, 999 | 4, 419, 999 |

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：日本語教育
キーワード：学習理論

１．研究開始当初の背景

（１）背景

近年、英語教育や日本語教育をはじめとする外国語教育は、より実践的コミュニケーション能力の育成に焦点を当てるようになってきている。言語使用において文化を無視したコミュニケーションは成立しない、すなわち言語教育と文化が不可分な関係にあること

を鑑みると、言語教師に必要な資質・技術についての書、例えば日本語教師養成のための指導書においても、教師としての取り組みについての指針があるべきだと思われるが、現状は教材・教具についての記述（生教材の扱い方）や読みの指導についての記述、教科書分析についての記述に、言語教育に文化という要素をどのように、どこまで取り入れるのかといった視点が取り入れられているものは皆無に近い。日本語教育の中で、おそらくその重要性は意識されつつも、現実には共有された知見がないと言える。これは結果として、教材開発や教材選定にあたっては、未だ学習者のニーズや関心、日本語レベル以外の根拠がなく、極端なステレオタイプを内包した教材であれ、国際的感情に抵触するかもしれない政治的・歴史的問題を扱う教材であれ、教育機関も担当教師も、上述の根拠と担当教師の経験知のみで採用の可否を判断するしかない状況を作り出している。質の高い言語教育を目指すのであれば、教材、授業、教師、学習者などの関連に着目し、理論につながるような手法を持った研究が待たれる。

（２）先行研究

先行研究を見ると、教材については、昨今の、教科書やメディアにおける様々な対象の描かれ方が読み手に対して問題のあるメッセージを送っていることへの意識の高まりを受け、日本語教育においても、野呂他（2001）のクリティカル・ディスコース・アナリシスなど情報発信の意識の転換を狙う研究が盛んになっている。特に、日本語教科書が日本社会や文化関係の題材を用いた場合は、留学生が触れる、まとまった「日本・日本人について」の情報にもなるため、日本語面だけでなく、留学生に日本や日本人に関して暗黙のメッセージを送るものとして当然吟味される必要がある（恒吉、2001）。したがってこれからの研究では、ある程度まとまった情報を扱いつつ、教科書が発する情報と学習者との関係を検証した上で、教師論や教材論につながる理論を構築することが求められる。授業・教師、学習者については、福永他（2004）など、学習者の学びのメカニズム解明ための研究も始まっているが、方法論が確立していないため記述的・事例的な内容にとどまり、教育実践の指針の提供までに至っていない。学習者と教材との関連を扱ったものはほとんどない。

（３）

研究代表者および研究分担者（近藤，2008年度まで）は言語教育教材の内容面に対する問題意識から、教育学の研究者との合同プロジェクト（恒吉、2001）を進め、教育実践として中・上級以降の教材開発を進めてきた。初級から中級レベルにおいては経験的に、教材開発者が特に文化の扱いに配慮すべきではないかと考えているが、教材と学習者との関連に着目した理論がない中で、教育実践の根拠となる理論の開発の必要性を感じている。研究代表者と研究分担者（小澤）は、広瀬他（1996）等の日本語教育カリキュラム開発のための共同研究から教育実践からの提案を行ってきたが、事例研究を理論に発展させる質的研究の手法を模索する中で、社会心理学と臨床心理学の知見を持つ研究者により開発されたPersonal Attitude Construct 分析法（個人別態度構造、ＰＡＣ分析法）と、社会言語学の調査手法であるソーシャル・ネットワーク法が、教材と学習者との関連に着目した理論の構築に有用であると考えるに至った。

２．研究の目的

以上の学術的背景を踏まえ、本研究は教材と学習者との関連に着目した理論の構築に向け、特に学習者が教材から受ける影響と学習者要因との相関を解明することを目的とする。

学習者が教材から受ける影響は、A）すべてのレベルの学習者が影響を受ける、B）どのレベルの学習者も影響を受けない、C）あるレベルを閾値として、それを上回るレベルの学習者は影響を受けない、３つの仮説が考えられる。

（A）は日本語教師をいかなる場合でも日本や日本語を代表するものと捉える場合の考え方で、（B）はこれと相反する考え方であり、（C）は両者の中間に位置する考え方である。研究代表者と研究分担者（小澤）は、これまでに日本語学習者からの調査協力を得て、日本語教材に掲載されている読み物を材料として、日本留学中の日本語学習者を対象としたＰＡＣ分析をパイロット的に実施し、ここから教材が学習者に与える影響は（C）であり、その閾値は学習者要因と関連があるのではないか、特に学習者の日本との関わりの深さ（密度）が関連しているのではないか、という予想を立てる段階まで、研究を進めている。そこで、本申請では、学習者要因を特定するためのフェイスカードを検討した後に、日本留学前・留学中・留学後の学習者を対象に縦断的にＰＡＣ分析を実施し、学習者が教材から受ける影響と学習者要因の相関を探りたい。

３．研究の方法

研究手法として採用を考えているＰＡＣ分

析法は「当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」（内藤、2002）で、この分析からは、個別性とともに、たとえ１事例であっても、ある種の典型としての普遍的法則を見いだせることが報告されている（内藤、2000）質的研究の手法である。近年、ＰＡＣ分析法は日本語教育でも取り入れられているおり、日本語学習者の授業観（安・渡辺・才田、1995）の他、最近は日本語教師養成に関連する研究（横林 2004、安・渡辺・内藤　2004）で活用される傾向にあるが、学習者と教材との関連を探る研究はない。

研究代表者および研究分担者はこの研究手法を用いつつ、研究の第１段階ではＰＡＣ分析の実施に向けた調査計画とフェイスシートの検討を行う。具体的には、丸山（研究代表者）と近藤（2008 年度まで研究分担者）は教材開発およびカリキュラムデザインの観点から、丸山（研究代表者）と小澤（研究分担者）は教育実践の観点から、調査計画を検討する。またフェイスシートの作成を行う。

また第２段階では、第１段階をふまえて、調査地域・調査対象の選定を行い、留学前の日本語学習者を対象とするＰＡＣ分析を実施する。具体的には

（1）調査地域・対象の選定は、研究代表者の所属機関（横浜国立大学）および、研究分担者の所属機関（東京大学・国際基督教大学）と学生交流協定のある大学教育機関の中からＰＡＣ分析で扱う読解教材の特徴に合った調査地域を選定・調整を行う。（2）研究代表者および研究分担者は選定した調査地域に渡り、留学前の日本語学習者を対象としたＰＡＣ分析を実施する。（3）研究代表者および研究分担者は（2）の結果の考察を行う。（4）研究代表者および研究分担者はが、必要に応じて研究計画の調整を図る。（5）研究代表者および研究分担者が第２段階（その１）で実施した調査地域に渡り、日本留学後の日本語学習者を対象としたＰＡＣ分析を実施する。(6) 研究代表者および研究分担者が第２段階の２つのＰＡＣ分析の結果の考察を行う。

第３段階研究代表者および研究分担者が３時点のＰＡＣ分析を総合して学習者が教材から受ける影響と学習者要因との相関の解明を目指す。本研究の成果を国内外の学会・研究会で広く報告し、教材と学習者との関連に着目した理論の構築に向けた提案を行う。

## ４．研究成果

以下、（１）研究の主な成果、（２）得られた成果の国内外における位置づけと今後の展望について報告する。

（１）研究の主な成果

①研究手法の検討

研究手法としてＰＡＣ分析法の妥当性を確認し、より洗練させるために、研究代表者らが主催する「ＰＡＣ分析と日本語教育研究会」を 5 回（2007 年 10 月、2008 年 11 月、2009 年 10 月、2009 年 2 月、2010 年 10 月）開催し、ＰＡＣ分析インタビュー方法に精通するとともに、統計的側面からの検討し、質的研究手法についても知見を深めた。

発表論文［雑誌論文］④坪根・小澤・嶽肩（2009）、小澤・丸山（2010）、［学会発表］内藤・能智・丸山・小澤（2010）、小澤・丸山(2009) などを通し、研究成果を発表した。

②フェイスシートの検討

本研究の試行段階で、「調査協力者自身の日本との様々な出会いや経験が、調査協力者の読みに影響を与えているのではないか、つまり学習者と読み教材とのインタラクションは学習者の「個」の経験に支えられているのではないか」という感触を得たことから、「個」の経験をある程度類型化できるようなフェイスシートを開発することが、日本語教材と学習者のインタラクションの傾向と学習者要因との関係を解明する手がかりになるという可能性を得た。このため、初年度には、学習者要因の特定に向けたフェイスシートの改善という課題が出た。そこで、［雑誌論文］丸山・小澤（2008）は、文化的に極端なステレオタイプが含まれる読み教材から日本語学習者が感じることの分析に用いるフェイスシートの工夫について考察した。

③読解刺激文の検討と日本語教師のステレオタイプへの姿勢

本研究で読解刺激文を採用するにあたっては、多様な日本語学習者への実践経験を持つ日本語教師の協力を得た。

本研究は教材開発における日本社会・文化の扱い方について、授業運営、さらには留学の意味という観点から考察し、よりよい形を模索することを最終的な目標とし、学習者と読解教材とに焦点を当て、学習者が、ステレオタイプ的な読解教材を読んだ場合､実際にどのような影響を受けるのか、またその影響は学習者のどのような属性とどのような関連があるのか、留学体験がそこにどのように関わるのかを中心的に研究

するものであるが、一方で、教壇に立つ教師は日本語教材をどう捉えているかという問いが生まれた。

そこで、発展的研究として、多様な日本語学習者への日本語教育実践の経験を持つ、高等教育機関所属の日本語教師が、ステレオタイプ性の強い日本語読解教材に盛り込まれたステレオタイプをどう認知するかについて考察した。パイロットスタディであるこの試みでは、全ての教材についてほとんどの教員がステレオタイプ性を認知しており、ほぼ同じような箇所にステレオタイプ性を感じたことがわかった。また、具体的にどのようなことを感じたかというコメントを分析した結果からは、同じ箇所についてコメントしていても、その内容には個人差がよく現れており、そこには教師らの専攻・関心分野やそれまでの人生の来歴などが反映されているのではないかということが予測された。

また、ステレオタイプ的教材の扱いにおける昨今の議論を検討した上で、「ステレオタイプ性の盛り込まれている教材をどう使うか」ということよりも教材そのものの質の改善を考えるべきではなかろうか。つまり、教材作成の段階でどのような情報をどのように教材化していくか、について、ステレオタイプ的情報の伝播を防ぐという観点からもより入念に検討するべきだという方向付けをするとともに、様な文化的背景の学習者に接する機会が多い日本語教師だからこそ、欧米偏重の傾向や特定の文化をデフォルメする危険性などに敏感であっていいはずであるのに、むしろ後れているかに見える情報が盛り込まれている教科書の存在をどう捉えるのか、そのような読解教材をクラスでどのように扱うか、どのようなタスクを考えるか、といった点を含めて教科書分析・教科書開発に関する議論をしていくことが急務であることを指摘した。

④留学前・中の調査結果

現在、留学前・中４名の短期留学生についての分析を終え、[雑誌論文]③丸山・小澤(2011)、成果を報告した段階である。

フェイスシートへの回答と、それに基づくインタビューおよびPACインタビューの発言から４名の属性や留学前・中の環境の異同を見ると、４名の共通点や相違点は、属性や各人をとりまく環境条件によって整理できるが、それを分析しても今回観察された傾向の異なりを決定づける要素を、単純に日本語力や受け入れ先の大学の環境、民族性などに求められない。しかし、インタビュー内での発言に現れた日本人との接触経験に着目して、その関連で属性や各人をとりまく環境条件を眺めると、日本人と個人的なつながりを初めて持ち、留学前と比較して日本人との接触状況に大きな変化があったケースと、日本人との接触経験が、家族や友人、高校時代の日本留学など、留学前から豊富にあるケース、今回の留学における日本人との人間関係は留学前のそれと質的にそれほど変化がなく、やや表層的なレベルにとどまったケース、という３つのタイプが見えてくる。すなわち、日本人との接触経験の有無と、さらにその経験が本人にとってある程度新鮮味があるかどうかという接触の質の相違とが、インタビュー内容の相違を生んだ可能性があることがわかる。

この結果から、（１）留学中であっても、表層的な接触経験にとどまった日本語学習者の場合、ステレオタイプ的な日本像をくつがえすような批判的な読みを支える体験がないという示唆が得られ、近年、教科書に提示された文化的な情報を事実として捉えることの問題点を指摘し、批判的に扱う重要性が指摘され始めたが、ステレオタイプ的な情報の多い教材が抱える問題を批判的な読解活動で解決する授業実践を行う場合、それを可能にする体験は留学すれば得られるわけではないということは教員が留意すべきであるという主張を行った。またこれに関連して（２）留学中の日本語クラスの新たな機能として、日本事情・日本文化についてのテキストを読解の授業で扱う際、日本をより深く知るための教材というよりも、自分の体験に照らし合わせて各自の持つ日本像を共有するための教材を選択・作成するという視点も必要であり、またそのような視点から授業活動を考えるという可能性があることを指摘した。

⑤読解刺激文の提示パターンの検討

縦断的研究である本研究において、読解刺激文は、現在異なる３つものを提示しているが、検証のために、同一のものを提示するパターンでの縦断研究を後追いで実施した。

（２）得られた成果の国内外における位置づけと今後の展望

本研究は、従来教材分析と授業観察に重点がおかれてきたこの研究分野に、学習者の視点を取り入れた点に特徴があり、研究期間を通して、広く国内外で成果報告を行ってきた。今後は、日本語授業を学習者要因の一つとして、送り出し側の日本語教育

担当者と連携し、留学前後の情報を直接得るとともに、教員への調査も並行して実施する。(2)異文化への対応の様子などを含めた形で学習者要因を詳細に検討し、学習者と読解教材とのインタラクションとの関連を見る。(3)（1）（2）の成果から教材論に貢献する成果を発信するなどして、異なる読みをする日本語学習者相互のインタラクションを活用した授業を実施し、授業運営に貢献する成果を発信したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

①丸山千歌・小澤伊久美、日本語教科書に見られるステレオタイプを日本語教師はどうとらえたか−多様な日本語学習者への実戦経験を持つ日本語教師へのパイロットスタディ−、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、18 号、2011、33-52

②小澤伊久美・丸山千歌、ある若手日本語教師の海外派遣前後の意識の変容、ICU 日本語教育研究、査読有、2011、34-53

③丸山千歌・小澤伊久美、ステレオタイプ的な読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか−日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆−、日本語教育研究論集（中国　華東師範大学出版会）、査読無、１号、2011、印刷中

④丸山千歌・小澤伊久美、日本語学習者と読解教材のインタラクションの解明に向けた縦断的調査－ＰＡＣ分析を研究手法として－、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、17 号、2010、101-133

⑤坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江、教師のビリーフ研究における PAC 分析活用の可能性と留意点―HALBAU と SPSS による分析結果の相違についての考察から―、言語文化と日本語教育、査読有、38 号、2009、30-38

⑥小澤伊久美・丸山千歌、PAC 分析における好ましい統計処理とは―ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために―、ICU 日本語教育研究、査読有、6 号、2010、27-47

⑦嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊久美、教師の実践的思考を探る上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題−日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3)−、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、16 号、2009、37-66

⑧要弥由美・小澤伊久美、統計は怖くない！図を見てわかる直感的統計分析　論文理解のための構造方程式モデリング（SEM）入門」WEB 版、日本語教育実践研究フォーラム報告（WEB 版報告書）、2008、web 版のため表示なし

⑨近藤安月子・丸山千歌・東伴子・バルバラ・ピッツィコーニ、日本と海外の日本語教育機関の教育連携の模索−短期交換留学プログラムの学習者アンケートから−、小出記念日本語教育研究会論文集、査読有、16 号、2008、69-90

⑩恒吉僚子・近藤安月子・丸山千歌、国際化戦略としての英語、東京大学大学院教育学研究科紀要、査読無、47 号、2008、87-100

⑪小澤伊久美、コース・デザインにおける「時間的余裕」と「他者」の意義−ある上級日本語学習者へのインタビュー・データから−、ICU 語学研究、査読有、22 号、2008、103-118

⑫丸山千歌・小澤伊久美、ＰＡＣ分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題―日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために―、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、15 号、2008、3-20

⑬近藤安月子・丸山千歌・東伴子、日本の短期留学プログラムにおけるフランスの日本語学習者−学習者対象のアンケート調査結果が示唆すること−、ヨーロッパ日本語教育、査読有、vol.11、2007、112-139

⑭丸山千歌、日本語学習者が日本語読解教材から受ける影響―読解内容を知る上でのＰＡＣ分析の有効性―、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、14 号、2007、145-158

〔学会発表〕（計 12 件）

① 丸山千歌、JF 日本語教育スタンダードの課題と『新界標日本語』の開発、第４期華東地区教師研修会、2010 年 12 月 19 日、華東師範大学（中国）

② 内藤哲雄・能智正博・丸山千歌・小澤伊久美、ＰＡＣ分析のデータを実施者・被験者・第三者が共に語り合うデータセッション、PAC 分析学会第４回研究大会（大会企画）、2010 年 12 月 11 日、横浜国立大学

③ 嶽肩志江・坪根由香里・八田直美・小澤伊久美、PAC 分析と質問紙調査の併用によるノンネイティブ日本語教師のビリーフ研究　－あるタイ人教師の事例より－、PAC 分析学会第４回研究大会、2010 年 12 月 11 日、横浜国立大学

④ 丸山千歌・小澤伊久美、日本語学習者の経験は日本語読解教材に対する反応にいかに表れるか―PAC 分析法を用いた縦断的研究から―、世界日本語教育大会、2010 年 7 月 31 日、台湾国立政治大学

⑤ 坪根由香里・嶽肩志江・八田直美・小澤伊久美、PAC 分析によるタイ人新人・経験日本語教師の「いい日本語教師」像の比較、世界日本語教育大会、2010 年 7 月 31 日、

台湾国立政治大学
⑥ 小澤伊久美・丸山千歌、SPSS と HALBAU による PAC 分析インタビューの比較―デンドログラムの相違がインタビューに与える影響についての一考察―、PAC 分析学会第 3 回研究大会、2009 年 12 月 19 日、明治学院大学
⑦ 坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊久美、日本語教師のビリーフ調査へのＰＡＣ分析の活用について－先行研究とパイロット調査との比較から－、ＰＡＣ分析学会第 2 回研究大会、2008 年 12 月 6 日、東邦大学
⑧ 要弥由美・小澤伊久美、研究手法体験型ラウンドテーブル　統計は怖くない！　図を見てわかる直感的統計分析　論文理解のための構造方程式モデリング（SEM）入門　、2008 年度日本語教育学会実践フォーラム、2008 年 8 月 3 日、早稲田大学東伏見キャンパス
⑨ 鈴木庸子・小澤伊久美、帰国生のための日本語教育‒漢字教育から情報発信能力の養成へ（ポスター発表および口頭発表）、日本認知言語学会第 8 回全国大会、2007 年 9 月 23 日、成蹊大学
⑩ 近藤安月子・丸山千歌・バルバラ・ピッツィコーニ、日本留学予備軍の学習者が持つ日本語学習への期待－英国の学習者アンケートから－（ポスター発表）、ヨーロッパ日本語教師会、2007 年９月７日、ロンドン大学 SOAS
⑪ 丸山千歌・小澤伊久美、PAC 分析データを基に実践研究を考える－読解教材を刺激とした留学生への質的調査から－(研究手法体験型 RT)、第６回　日本語教育学会実践研究フォーラム、2007 年８月５日、早稲田大学東伏見キャンパス
⑫ 近藤安月子・丸山千歌・東伴子・バルバラ・ピッツィコーニ、日本と海外の教育機関の教育連携の模索－短期交換留学プログラムの学習者アンケートから－、第 16 回小出記念日本語教育研究会、2007 年６月 30 日、東京女子大学

〔図書〕（８件）
① 近藤安月子・丸山千歌、東京大学出版会、中・上級日本語教科書　日本への招待　第2版 【教師用指導書】、2010、156 頁
② 丸山千歌（主編）・小澤伊久美（副主編）、北京大学出版会、総合日語　第２冊　改訂版、2010、400 頁
③ 横浜国立大学留学生センター編、成文社、『国際日本学入門 トランスナショナルへの 12 章』(丸山千歌が第 10 章を執筆)、2009、228 頁
④ 近藤安月子・丸山千歌、東京大学出版会、中・上級日本語教科書　日本への招待　第2版 【予習シート・語彙・文型】、2008、208 頁
⑤ 近藤安月子・丸山千歌、東京大学出版会、中・上級日本語教科書　日本への招待　第2版 【テキスト】、2008、178 頁
⑥ 近藤安月子・丸山千歌、東京大学出版会、中・上級日本語教科書　日本への招待　第2版 【CD3教材セット】、2008、381 頁
⑦ 小川貴士編著岡本能里子・小澤伊久美・西條美紀・西口光一・細川英雄・丸山千歌・三代純平・矢部まゆみ、くろしお出版、日本語教育のフロンティアー学習者主体と協働（第７章　学部初年次教育としての日本語教育に求められるもの　を担当）2007、133-160
⑧ 小川貴士編著岡本能里子・小澤伊久美・西條美紀・西口光一・細川英雄・丸山千歌・三代純平・矢部まゆみ、くろしお出版、日本語教育のフロンティアー学習者主体と協働（第８章　日本語教材の文化トピックからの学習者の発想　を担当）、2007、161-184

〔その他〕
ホームページ等
http://publicize.exblog.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
丸山　千歌（MARUYAMA CHIKA　　）
横浜国立大学・留学生センター・准教授
研究者番号：30323942

(2)研究分担者
小澤　伊久美（OZAWA IKUMI）
国際基督教大学・教養学部日本語教育課程・講師
研究者番号：60296796

(3)連携研究者
無し